

H 2 5 . 3 . 1 西方寺についての 1 考察 私文 井上元生

『筑前国続風土記拾遺』青柳種信著、天保年間頃成立。

拾遺本文書き起こし

仏寺

西方寺

本堂。五軒四面。寺地四畝二十四歩。檀家百三十二戸

本村ニ在リ 天龍山無量院ト號ス 浄土宗鎮西派 中本山那珂郡住吉村妙圓寺末寺ナリ。寺記ニ 安徳天皇 西海に趣キ 大宰府を落玉フ時 小松氏 守本尊ヲ持下リ 残シ置レシヲ 其後當國ノ國司ヨリ 堂宇ヲ建立シテ崇重セラレシ。

應安元年 大鳥居信商 水田ニ館ヲ立。兩筑兩肥豊後五國ノ内 天満宮神料数千町ノ司トシテ 威ヲ振ヒ 其子信辨ハ 宰府ニアリ。

永和元年春 筑前肥前ノ守護少貳冬資ガ時 天神山ノ木ヲ伐出ス。信辨ガ侍共 是を怒テ打捕ル。少貳聞テ 大ニ怒リ 大軍ヲ率テ寄来ル。寺僧社人数百人防戦ストイヘトモ 大軍ニ打負テ 信辨生害シ 其子龜松丸 乳母妙蓮尼ノ懷ニ入り筑後國水田庄ニ落行シニ。後ヨリ少貳ノ軍兵 百騎ハカリ 追来リケレバ 天山へ逃レ入り 阿弥陀堂ノ下ニ隠レテ 一命ヲ助レリ。故ニ應安七年龜松丸 大鳥居家相續ノ時水田庄ニ請受テ 代々ノ守本尊トス。

按ニ永和元年ハ後園院ノ年号ニテ 後龜山天皇天授元年ナリ。應安七年ハ其前年ナリ。信辨永和ニ出走シテ 應安帰ルヘキ理ナシ。九ノ寺記年記ノ誤最多キ比類ナリ。

明治二年己巳十月水田庄ヨリ 本寺ニ歸シ移ス。永禄年中 念譽行明中興開山タリト云。

一説ニ 白鳳元年法相利生上人經始繫榮ノ巨刹ナリ。中世ノ騷乱ニ炎上シ 其後廢絶セシヲ 文禄年中 浄土宗行明再興セリト云。

此寺ヨリ痘瘡ノ符ヲ出ス。寺地ニ 観音堂 鐘楼等アリ。

[拾遺本文：安徳天皇 西海に趣キ 大宰府を落玉フ時 小松氏
守本尊ヲ持下リ 残シ置レシヲ 其後當國ノ國司ヨリ 堂宇ヲ
建立シテ崇重セラレシ。]

解説

「太宰府を落ち給う時」は「壽永 2 年（1183 年）」

「その後当国の国司より」はその後がいつか分からないが、[其後とあるので、少なくとも 1300 年代位までには本堂を建立したのではないか。

安徳天皇

『吾妻鏡』（吉川本）頼朝将軍記の首書。安徳天皇の即位が記されている。治承 2 年（1178 年）11 月 12 日に生まれ、生後まもない 12 月 15 日に立太子。治承 4 年（1180 年）2 月 21 日に踐祚し、4 月 22 日に数え年 3 歳（満 1 歳 4 ヶ月）で即位するが、幼年のため実権はなく政治は清盛が取り仕切った。即位の年に清盛の主導で遷都が計画され、福原行幸（現在の神戸市）が行なわれるが、半年ほどで京都に還幸した。壽永 2 年（1183 年）、源義仲の入京に伴い、三種の神器とともに都落ちする。平家一門に連れられ大宰府を経て屋島に行き、行宮を置いた。

後小松天皇

生年： 永和 3/天授 3.6.27（1377.8.1） 没年： 永享 5.10.20（1433.12.1）
南北朝・室町時代の天皇（在位 1382～1412）。

足利義満	1369 年 2 月 7 日～1395 年 1 月 8 日 (正平 23 年・應安元年 12 月 30 日～應永元年 12 月 17 日) 1368 年 = 應安元年 <u>室町時代前期の室町幕府第 3 代将軍</u> （在職 <u>1368 年 - 1394 年</u> ）である。父は第 2 代将軍 <u>足利義詮</u> 、母は側室の <u>紀良子</u>
------	--

[拾遺本文：永和元年春 筑前肥前ノ守護少貳冬資ガ時
天神山ノ木ヲ伐出ス。信辨ガ侍共 是ヲ怒テ打捕ル。少
貳聞テ 大ニ怒リ 大軍ヲ率テ寄来ル。寺僧社人数百人
防戦ストイヘトモ 大軍ニ打負テ 信辨生害シ 其子龜
松丸 乳母妙蓮尼ノ懐ニ入り筑後國水田庄ニ落行シニ。
後ヨリ少貳ノ軍兵 百騎ハカリ 追来リケレバ 天山へ

逃レ入り 阿弥陀堂ノ下ニ隠レテ 一命ヲ助レリ。]

解説

應安 7 年 = 1374 年 永和元年 = 1375 年 少貳が暗殺された年に当たる

少貳 冬資(しょうに ふゆすけ)

生年未詳 - 1375 年 9 月 22 日(天授元年/永和元年 8 月 26 日))は南北朝時代の武将。北九州の名門少貳氏当主。少貳頼尚の次男。直資の弟、頼澄の兄。

冬資が当主を務めていた頃、九州では菊池氏や懐良親王などの南朝勢力が台頭し、北朝勢力、すなわち幕府側の勢力は押されていた。このため冬資は大友氏や島津氏と協力して南朝勢力と戦う一方で、幕府から新たな九州探題を派遣してくれるように要請していた。時の将軍・足利義満はこれに応じて 1371 年、今川貞世(了俊)を探題として送り込んだ。了俊のもとで 1372 年から反攻に転じた幕府勢力は、徐々に南朝勢力を駆逐し、1374 年には島津氏久、大友親世、そして少貳の援軍を得て一挙に南朝勢力を駆逐しようとしたが、冬資はこの頃、了俊と仲が悪かったために援軍を送らなかった。しかしこの為、了俊に南朝側と内通していると猜疑され、翌年に冬資は了俊によって暗殺されてしまったのであった(水島の変)。その後は弟の少貳頼澄が家督を継ぎ、少貳一族は南朝方として了俊に抵抗した。

[拾遺本文: [1 説ニ・・・中世ノ騒乱ニ炎上シ](#)]

解説

水島の変(みずしまのへん) : 中世の騒乱か?

南北朝時代末期の永和元年/天授元年 8 月 26 日(1375 年 9 月 22 日)に、九州探題今川了俊が、筑前守護少貳冬資を肥後菊池郡水島(現在の熊本県菊池市)で暗殺した事件。応安 4 年/建徳 2 年(1371 年)に、九州探題として派遣された今川了俊の目覚しい働きによって翌年には南朝の懐良親王・菊池武光が拠点としていた大宰府を陥落させて自己の根拠とし、更に菊池武光・武政父子の死に乗じて南朝方の新本拠地となった筑後高良山を陥落させた。これに対して鎌倉幕府以来筑前を支配をしていた北朝方の少貳氏は筑前の支配権を了俊に奪われることを危惧、了俊に対して次第に非協力的な態度を取るようになり、了俊も筑前を九州探題の直轄にすべく少貳氏を抑圧する方針を採り始めた。永和元年/天授元年に入ると、了俊は菊池氏の本拠である肥後侵攻を本格化させて 7 月 12 日に水島に兵を進めた。その際、九州の 3 名の有力守護である大隅守護島津氏久・豊後守護大友親世、そして筑前守護少貳冬資を肥後水島の了俊の元に召集した。だが、冬資は参陣を拒んだため、了俊は氏久に冬資の来陣を促させた。両者の対立を憂慮する氏久の説得によって冬資は漸く水島に参上したが、了俊は歓迎の宴と称して冬資を自陣に召集して謀殺した。面目を潰された氏久は帰国して了俊と絶縁し、親世も中立的な態度に転じた。これを見た菊池軍の反撃を受けて 9 月 8 日には了俊は水島からの撤退を余儀なくされるも、開き直った了俊は自ら筑前守護の兼務を宣言、後に冬資の甥の貞頼に守護職を譲ったものの、筑前の実権を掌握した。この事件によって島津氏・大友氏

は離反し、これを見た九州の南朝側が一斉に蜂起することになるが、了俊は北九州における自己の権力基盤を固めることに成功して、以後積極的な九州経営を展開する。だが、高麗の国使である儒学者の鄭夢周に独自に会談をもって外交交渉を行うなど、日明貿易などの外交権を独占を目指す3代将軍足利義満の方針と対立し、後日の失脚の遠因ともなった。

高三瀨村（中世）とは・・・に龜松丸の名前が見える。

『南北朝期～室町期に見える村名筑後国下妻郡水田荘のうち康永3年10月25日の大鳥居信高宛行状に、「北水田南島内北牟田并犬江牟田」とある（西高辻文書／大日料6-8）永和4年8月10日水田荘領家高辻長衡は、南島村を知行するよう大鳥居龜松丸に命じ、・・・』
康永3年は1344年
永和4年は1378年

参考資料

〔拾遺本文；天山〕

天山 村ノ東北ニアリ 峯ノ尾山家村 此村ニテハ 小古野山
西北阿志岐村 此村ニテハ 蘆城山ト云 界ヘリ 山麓本村ヨリ
絶頂へ十五町 險阻松立ナリ。藻塩草ニ雨山ヲ筑前ニアリト云。
此山アルヘシ。古歌アリ。

藻塩草「雨山ノアタリノ雲ハウチツケニ
クモリテノミソ見エ渡リケル」

藻塩草：室町時代の連歌師宗祇（そうぎ、1421～1502年）の弟子である宗碩（そうせき、1474～1533年）が、永正13年（1513年）頃に編んだという膨大な歌語辞書。連歌を詠む者のために古文獻より語句を書き集めた書。「藻塩草」とは、塩を採取するために用いる海藻で、「搔き集め」て潮水を注ぐところから、「書き集める」に掛けて用い、これに因んで「歌語を書き集めた学書」を意味する。

〔拾遺本文：[1 説ニ・・・中世ノ騷乱ニ炎上シ](#)〕

解説

天山（中世）とは

南北朝期に見える地名。筑前国御笠郡のうち。雨山とも書く。応安 5 年 1 月 12 日に九州探題今川了俊は大宰府を陥落させるが、応安 7 年 7 月日の毛利元春軍忠状(毛利家文書 1/大日古)には「於雨山麓御合戦之時」と見え、応安 5 年 7 月 22 日の雨山のふもとでの合戦の戦功が述べられている。また応安 8 年正月日の山内通忠軍忠状(山内首藤家文書/大日古)には「天山凶徒没落」とあり、応安 4 年 8 月 10 日に天山において南朝方が没落していることが知られ、今川了俊は備後の山内通忠の軍忠状に証判を加えている。天正年間の「指出前之帳」によれば、天山村の地積・分米は田 14 町余・124 石余、畠 3 町余・17 石余、合計 18 町余・142 石余であった。

とあるので、「中世ノ争乱」とは應安 5 年 7 月 22 日天山のふもとの合戦で炎上したとも考えられる。

[拾遺本文：永禄年中 念誉行明中興開山タリト云。]

解説

永禄年中 永禄元年（1558 年）～永禄 12 年（1569 年）

中興するとあるので、意味から考えて、行明が開祖ではないのではないかとと思われる。

中興：いったん衰えた物事や状態を、再び盛んにすること

参考資料 白鳳文化 出典：フリー百科事典『ウィキペディア(Wikipedia)』

白鳳文化（はくほうぶんか）とは、645 年（大化元年）の大化の改新から 710 年（和銅 3 年）の平城京遷都までの飛鳥時代に華咲いたおおらかな文化であり、法隆寺の建築・仏像などによって代表される飛鳥文化と、東大寺の仏像、唐招提寺の建築などによって代表される天平文化との中間に位置する。なお、白鳳とは日本書紀に現れない元号（逸元号や私年号という）の一つである（しかし続日本紀には白鳳が記されている）。天武天皇の頃に使用されたと考えられており（天智天皇のときに使用されたとする説もある）、白鳳文化もこの時期に最盛期を迎えた。